

5-3 教員及び職員の情報通信技術活用能力の研修

5-3-1 FDのための情報技術研究講習会

<事業計画>

私立大学教員の ICT 教育技術力の向上を支援するため、大学・短期大学の教員を対象に「FDのための情報技術研究講習会」を学外 FD として実施する。学修効果を高めるオンライン授業、不正防止対策、授業運営ツールの紹介、LMS の使用方法、著作権、フォーラム型授業などについて、基礎的な理解を深め実践できるようにするため、「全体会」と「ワークショップ」を設定し、その上で「全体討議」として参加者が希望するテーマについて、自由に情報交流する場を設け、理解の深化を図る。

<事業の実施結果>

「FD 情報技術講習会運営委員会」を継続設置し、「FD のための情報技術研究講習会」を実施した。以下に、委員会及び研究講習会の活動を報告する。

FD 情報技術講習会運営委員会

2022 年(令和 4 年)11 月 2 日、12 月 26 日に平均 8 名が出席して 2 回開催し、開催計画の策定、実施準備を行った。

(1) 開催要項の策定

プログラムは、「全体会」で①授業の質保証のためのオンライン活用法、②対面とオンラインを効果的に組み合わせる反転授業の方略、③授業資料・オンデマンドコンテンツにおける著作権法上の注意点の情報提供を行うことにした。また、「ワークショップ」では、①動画教材作成の紹介、②反転授業のデザインと予習動画制作、③対面・オンラインでの ICT 活用、④ハイフレックス授業のデザインと方法、⑤オンラインで多職種連携教育を始めよう、⑥オンライン授業の学修評価の 6 コースを設定し、参加者が希望に応じて参加するアラカルト方式とし、理解の深化を目指して、以下のように開催要項を策定した。

2022 年度 FD のための情報技術研究講習会開催要項

1. 開催日程：令和 5 年 2 月 27 日（月）
2. 会 場：Zoom 会議室
3. 対 象 者：授業改善に情報通信技術の活用を希望される私立大学・短期大学教員
4. 講習会の概要

先生方は、3 年に亘りオンライン授業を体験され、学生にとって良かった面、不都合であった面を通じて、授業価値の最大化に向けた教育方法について、見直す機会を持たれたのではないかと思います。

ご承知の通り、コロナ禍を転機に対面授業に加えて教育のデジタル変革(DX)が進みつつあります。文部科学省においてもオンライン授業を導入して、学生一人ひとりの可能性を最大限に伸ばす学修者本位の教育への転換や、教育の質向上・高度化を目指した対面授業とオンライン授業を効果的に組み合わせた新しい学びの創出を大学に働きかけており、後戻りしないとしています。

これからは、対面とオンラインを合わせた授業を如何にデザインし、学生に最適な学びを提供できるかが問われるようになる中、実際にどのように自分の授業の中で展開していけば良いのか、不安や戸惑いを感じる教員も少なくないのではないのでしょうか。

そこで、本研究講習会では、授業の質保証のためのオンライン活用法、反転授業を中心とした対面・オンラインの組合せ授業、ハイフレックス型授業、教材作成・ICT 活用などについて、基礎的な理解を深め実践できるようにするため、「全体会」と「ワークショップ」を設定しました。

【全体会】

- (1) 授業の質保証のためのオンライン活用法
渡辺 雄貴 氏(東京理科大学教育支援機構教職教育センター教授)
- (2) 対面とオンラインを効果的に組み合わせる反転授業の方略

- 岩崎 千晶 氏(関西大学教育開発支援センター副センター長、教育推進部教授)
 (3) 授業資料・オンデマンドコンテンツにおける著作権法上の注意点
 中村 壽宏 氏(神奈川大学学長補佐、教育支援センター所長、法学部教授)

【ワークショップ】

ここでは、動画教材作成、反転授業のデザイン、ICT活用事例、ハイフレックス型授業のデザイン、分野連携授業、オンライン授業の学修評価について、知識理解や情報技術の情報提供を通じて、参加者同士で意見交換しながら理解を深めるため、参加される先生それぞれが希望に応じて参加するアラカルト方式で実施します。

- (1) ワークショップ 1
「動画教材作成の紹介：パワーポイントに字幕を付与したビデオ作成など」
朽尾 真一 氏(追手門学院大学経済学部経済学科准教授)
- (2) ワークショップ 2
「反転授業のデザインと予習動画制作」
岩崎 千晶 氏(関西大学教育開発支援センター副センター長、教育推進部教授)
- (3) ワークショップ 3
「対面・オンラインでの ICT 活用：LMS、2D メタバース、タブレット板書、講義室機器等の紹介」
及川 義道 氏(東海大学教育開発研究センター所長、理系教育センター次長・教授)
- (4) ワークショップ 4
「ハイフレックス授業のデザインと方法」
渡辺 博芳 氏(帝京大学ラーニングテクノロジー開発室所長、理工学部教授)
- (5) ワークショップ 5
「オンラインで多職種連携教育を始めよう：医療系分野からの提案」
片岡 竜太 氏(昭和大学統括教育推進室、歯学部歯学教育学講座教授)
- (6) ワークショップ 6
「オンライン授業の学修評価方法」
渡辺 雄貴 氏(東京理科大学教育支援機構教職教育センター教授)
「オンライン授業における経済系授業の学修評価実践」
高木 功 氏(創価大学経済学部長)

(2) 実施結果

2023年(令和5年)2月27日に開催し、Zoom会議室を会場に42大学2短期大学から60名の参加があった。以下に、アンケートを踏まえた結果を報告する。

1. 参加教員全員を対象とする全体会では、「授業の質保証のためのオンライン活用法」、「対面とオンラインを効果的に組み合わせる反転授業の方略」、「授業資料・オンデマンドコンテンツにおける著作権法上の注意点」について説明を行った。

参加された教員からの全体会の感想としては、「今回は、授業方法、反転学習、法的側面についての包括的な話とワークショップで多くのことを勉強できた」、「反転授業を始めコロナ後の大学を取り巻く授業手法の動向がよくわかりためになった」、「なんとなく肌で感じていたことを、裏打ちされたデータで解釈した説明を拝聴することで整理がついた」、「反転授業はやってみたいと思いつつ導入するに至らなかったが、1科目の1コマから始めてみようという考えを教えてもらい、なるほどと思った」などが寄せられた。

2. ワークショップの達成度を以下に掲載する。(アンケートの回答者 23名)

ワークショップ名	達成できた	見通しがたった	達成できなかった
① 動画教材作成の紹介	2割(1人)	6割(3人)	2割(1人)
② 反転授業のデザインと予習動画制作	2割(2人)	8割(8人)	
③ 対面・オンラインでのICT活用	1割(1人)	9割(6人)	
④ ハイフレックス授業のデザインと方法	1割(1人)	7割(5人)	2割(2人)
⑤ オンラインで多職種連携教育を始めよう		10割(5人)	
⑥ オンライン授業の学修評価	2割(2人)	8割(7人)	

3. ワークショップ参加者からの特徴的な感想を紹介する。

- ① 動画教材作成の紹介は、「自分で操作しながら話を聞くところまでいかなかったが、すぐに録画や資料を見直して字幕の付け方を習得したい」、「字幕を付けることについて、その方法が勉強になった。ゼミナールなど一部の授業でとり入れたいと思う」などの感想があった。
- ② 反転授業のデザインと予習動画制作は、「自分の授業でも実践できそうだと思う」、「医学部でシミュレーション教育を実施する上で、効果的な学修(実習)をするための知識習得の事前学習に提案しようと思う」、「反転授業(予習)をすることで、授業では何をさせて知識の定着の確認や応用になるのかを考えなければ奈良ないことがわかり、インストラクションデザインという面でも良い勉強になった」などの感想があった。
- ③ 対面・オンラインでの ICT 活用は、「2D メタバースを実体験でき貴重な体験でした」、「ブレイクアウトの議論で、同様の問題を抱えている教員が多いことが分かり安心した」、「期待通りの講習会の設計コンセプトと講師陣と参加者のみなさんでした」などの感想があった。
- ④ ハイフレックス授業のデザインと方法は、「既にハイフレックスに取り組み LMS を効果的に活用している教員と、視覚・聴覚など違和感のない、オンラインと対面のハイフレックス教育空間を創造したいという思いを共有できたことが良かった」、「意見交換は有意義であったが、悩みを打ち明け合うところで時間が来て、知的な活動に進まなかった」などの感想があった。
- ⑤ オンラインで多職種連携教育を始めようは、「多職種連携の授業の企画は、やはり準備が大変だと改めて思い、方向性が見えたように思う」、「自大学での実習シラバスの内容が不足していることに気づき、目標の設定、成果、評価方法が明確に示されていると学生も教員もわかりやすいと思った」、「なかなか連携が取れない分野の教員がどのような動きをしているのか、分かり大変参考になった」などの感想があった。
- ⑥ オンライン授業の学修評価方法は、「自分自身で試行錯誤するだけでしたが、実践例を伺うことができ、客観視するきっかけをいただいた」、「自分の授業でインストラクションデザインができているのか、改めて考えなおす良い機会となり、授業の改善につながれば良いと思った」、「シラバスの目標と評価について、他大学のシラバスを見ながら意見交換できたので、とてもためになった」などの感想があった。

5-3-2 大学職員情報化研究講習会

<事業計画>

私立大学職員の ICT 活用能力の開発・強化を支援するため、大学・短期大学の職員を対象に「大学職員情報化研究講習会」を情報提供及び DX に向けた実現構想のグループ討議を 11 月に 2 日間実施し、業務に直結する知識・理解の獲得と意見交換による実践的な考察力の促進を目指す。情報提供の内容としては、例えば、ICT 利活用の意義・好事例、DX に向けた学修支援環境(LMS)の取組み、学修支援を最適化する AI 活用等の取組み、オンラインによる就活支援対策、学生同士が交流する場のデザインと心のアフターケア、教学 IR システムの整備と活用、働き方改革・業務改革に求められる RPA 活用(ロボティック・プロセス・オートメーション)などが考えられる。

<事業の実施結果>

「大学職員情報化研究講習会運営委員会」を継続設置し、「大学職員情報化研究講習会」を 11 月にオンラインで開催した。以下に、委員会及び研究講習会の活動を報告する。

大学職員情報化研修講習会運営委員会

2022 年(令和 4 年)8 月 2 日、10 月 3 日、2023 年(令和 5 年)2 月 6 日に平均 12 名が出席して 3 回開催し、開催要項の策定、実施準備、開催結果の振り返りを行った。

(1) 開催要項の策定

11 月 15 日・16 日の 2 日間オンラインで、以下のようなプログラムで事前研修、全体会、グループ討議を実施することにした。

- ① 昨年度までは、従来の基礎講習コースと ICT 活用コースをそれぞれ開催していたが、基礎講習コース参加者が減少傾向にあることから、今年度は 1 コースに統合し、グループ討議参加の有無により、1 日コースと 2 日コースを設定し、「大学 DX 化に向けた取組みを考える」をテーマに実施することにした。
- ② 情報提供は、DX 化に向けた取組みを中心に「学修者本位の教育の実現」、「スマートキャンパス構想」、「医療系の学びにおける DX 推進」、「大学体験価値モデル」、「RPA の活用・効果」、「大学データの収集・分析」、「セキュリティ対策の基礎知識」を行うこととした。
- ③ 情報提供の後の 1 日コースでは、情報提供に関心ある課題について各参加者から感想・意見を受ける自由な討議の場をフリーディスカッションとして設置することにした。また、2 日コースでは、教育改革 DX、学生支援改革 DX、業務改革 DX について、自らがどのように関与すべきか、ICT を利活用した望ましい構想案を作り、発表・相互評価を行うこととして、以下のように開催要項を策定した。

2022 年度大学職員情報化研究講習会開催要項

「大学 DX 化に向けた取組みを考える」

1. 開催趣旨

学修者本位の教育への転換、質の向上を目指した新しい学びの創出、学修成果の質保証に向けた教学マネジメント確立の対応が急がれています。

ICT を駆使して教育の手法や仕組み、教職員の意識改革、学生一人ひとりに応じた学修支援を大学全体の問題として捉え、教育改革 DX、学生支援改革 DX、業務改革 DX に向けた取組みを着実に実行していくことが課題となっています。

そこで本研究講習会では、DX 化に向けた取組み情報を提供し、その上でフリーディスカッションを行うコースと、大学改革を目指した DX の構想案を提案するグループ討議のコースに分けて、DX への取組みと課題について理解の深化を図ります。

2. 対象者：私立大学・短期大学に所属する職員、賛助会員企業の社員(1 日コースのみ)

3. 日程：

- (1) 1日コース：情報提供とフリーディスカッション
11月15日(火)9時30分～15時30分
- (2) 2日コース：情報提供とグループ討議
11月15日(火)9時30分～17時、16日(水)9時30分～17時

4. 会場：Zoom 会議室

5. プログラム概要

(1) 情報提供 15日 9:30～13:45

- ① 開会挨拶
山名 早人 氏(早稲田大学理事、運営委員会担当理事)
- ② インTRODakション「大学改革 DX に向けた職員の役割」
木村 増夫 氏(上智学院理事、運営委員会委員長)
- ③ LMS の高度化と学修データ統合システムによる学修者本位の教育の実現
熊本 悦子 氏(神戸大学情報基盤センター教授)
- ④ 教育 DX に向けたスマートキャンパス構想
藤田 高夫 氏(関西大学副学長)
- ⑤ 学修課程・成果の可視化を目的とした医療系の学びにおける DX 推進
瀬戸 僚馬 氏(東京医療保険大学学長戦略本部教授)
- ⑥ 大学体験価値モデルの創造を目指して
寺澤 武 氏(桜美林大学学長室)
- ⑦ 創造的業務への移行を目指した RPA の活用・効果
三原 あや 氏(立命館大学財務部財務経理課長)
- ⑧ 大学データの収集・前処理から分析、結果の共有まで：そして価値創造へ
鎌田 浩史 氏(上智学院 IR 推進室チーフリーダー/上智大学基盤教育センター講師)
- ⑨ サイバー攻撃のリスクとセキュリティ対策の基礎知識
松坂 志 氏(情報処理推進機構セキュリティ対策推進部)

(2) フリーディスカッション(1日コース)15日 13:55～15:30

部門・大学規模などを参考にグループ分けを行い、情報提供の関心ある課題について各参加者から感想・意見を受け、自由な討議の場を設定します。

(3) グループ討議(2日コース)15日 13:55～17:00、16日 9:30～17:00

グループ討議では、①教育改革に向けた DX (デジタルトランスフォーメーション)、②学生支援改革に向けた DX、③業務改革に向けた DX について、具体的な課題を絞り込み、自らがどのように関与すべきか、ICT を道具として利活用した望ましい改善案の提言作りを行い、グループ発表・相互評価を通じて、主体的な考察力、イノベーションに取り組む姿勢の獲得を目指します。

① 事前研修

グループ討議に向けて、グループ内での事前意識合わせを行うため、事前に自己紹介シートを交換いただきます。

② 情報提供の振り返り

情報提供で特に重要と思った内容についてホワイトボードに記入し、ICT を利活用する意義・重要性についてグループ内で共有します。

③ 課題の洗い出し、解決策の構想を書き出し

教育改革に向けた DX、学生支援改革に向けた DX、業務改革に向けた DX の観点から、社会の変化に対応した大学教育・大学運営の在り方について、課題の洗い出し、解決策の構想を Web に掲載して掲示板で意見をうかがいます。

④ 発表・相互評価

掲示板の意見を踏まえて振り返りを行い、解決策の実現可能性を含めて構想をとりまとめ、オンラインで発表し、意見交換を行います。

⑤ 事後研修

グループ討議の成果、本講習会に参加して獲得したこと、今後 ICT をどのように業務に活かしていくか等についてとりまとめたレポート(Web 回答)を提出していただきます。

(2) 実施結果

35 大学 1 賛助会員から 66 名(1 日コース 44 名・2 日コース 22 名)の参加があった。以下に、実施結果の概要を報告する。

1. 情報提供

DX 化に向けた取組み、データの取扱い、情報セキュリティについて 9 件の情報提供を行い、ICT を駆使して教育の手法や仕組み、教職員の意識改革、学生一人ひとりに応じた学修支援に向けて理解の共有を図った。

2. 1 日コースのフリーディスカッション

情報提供の感想・意見や自大学の取組み・課題など、参加者間で情報共有する新たな試みとして設定した。前半は部門を混合して 5 グループ、後半は所属部門別の 3 グループに分かれ各 45 分、計 90 分間実施した。

ディスカッションでは、「同じ医療系大学として同様の悩みを共有できる内容であった」、「RPA 運用による労働時間の削減の取組み事例は興味深かった」、「施設設備が機材先行だけでなく活用が大事という点が印象に残った」、「遠隔授業の方法や LMS・動画配信の仕組みの話題が参考になった」、「ペーパーレス化の進捗状況・課題が聞けた」など積極的な意見交換が行われた。

3. 2 日コースのグループ討議

グループ討議は、4 グループに分かれ、「教育改革 DX」が 2 グループ、「学生支援改革 DX」と「業務改革 DX」が各 1 グループであった。具体的には、①形骸化しがちなポートフォリオを学修以外の情報や AI や教員によるフィードバック機能を実装することにより学生の主体性を引き出す提案、②学生一人ひとりに合わせた AI の導入や VR・メタバースを活用した新しい学びの提案、③ネット上仮想空間を用いた学生とのコミュニケーション円滑化プロジェクトの提案、④学生目線と組織目線に分けたチャットボットの導入による属人化を解消する DX の提案が行われた。

4. 参加者アンケートの一部紹介

- ① 情報関係に疎いため参加まで不安だったが、講習会では大学の DX・ICT 活用の現状とトレンドが理解できた。
- ② 他大学の現状等を知る良いきっかけとなった。
- ③ オンラインでのグループ討議であったが、活発な議論と情報交換ができた。
- ④ 討議を通じて自分の視点だけでは見えない気づかないことがあり、多角的な視点を持てるようになりたいと感じた。
- ⑤ 対面の方が進行しやすく、且つ議論が活発化しやすいと感じた。
- ⑥ DX 推進には、個々人の DX に対する理解と日々の情報収集の継続が必要であると感じており、新しい視点の獲得と今後の業務への刺激になった。

5. 次年度に向けた運営委員から意見の一部紹介

- ① 情報提供は好評だったが、グループ分けは、議論促進のために部署を考慮するなど工夫が必要ではないか。
- ② オンラインの割には積極的に取組む姿勢が感じられたが、経験年数に差があるグループは討論で噛み合わない部分もあり、コースを統合した課題もあった。
- ③ 講習内容は、スキルが身に付く演習型の研修ができないか。また、セキュリティや個人情報に関連する情報提供は必要ではないか。
- ④ どこまで踏み込んでサポートすべきだったか悩みどころであった。参加者を含めたコミュニケーションはオンラインの限界があるとの意見もあり、基礎講習コースだけでも対面での研修形態を検討することにした。

なお、開催結果の詳細は、巻末の 2022 年度事業報告書の附属明細書【2-7】を参照されたい。